慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	大阪市政研究所設立十周年記念論文集 大都市の研究
Sub Title	
Author	高橋, 潤二郎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1961
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.54, No.9 (1961. 9) ,p.842(110)-
JaLC DOI	10.14991/001.19610901-0110
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19610901-0110

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

せ、いわゆる先・後進国間の不均等発展を是正することに、その目的のすべてがあろう。

しかし、経済援助にまつわる問題点を殆んど網羅しているが、全般に、表面的にふれるにとどまり、深い分析が行なわれず、とくに最も重要な問題である急速な経済発展のためにはその援助をいかなる分野に配分すべきかの分析を欠いているのは、残念に思われる。したがって、本書は、問題点把握のための入門書として利用されることがのぞましい。著者は、王立国際問題研究所の国際経済学の教授で、長年後進諸国にあって経済顧問として活躍した人である。（七五〇円）

—深海博明—

＊　＊　＊

大阪市政研究所設立十周年記念論文集

『大都市の研究』

大阪市政研究所が創設されて以来、既に十年がすぎたが、同研究所は、それに先立って設けられた都市問題研究会、大都市行政調査会を母胎として、昭和二六年発足し、関西各大学の教授、助教授が中心となって、地方行財政の研究調査に従事してきたものである。特に、昭和三〇年以降は、その視点を大都市に移し、大阪市をメイン・フィールドとする実証的研究、いわゆる大都市生活圏の実態調査を中心とする一連の研究報告を発表しているが、本書は、これら過去数年間大都市の調査研究に従事してきたスタッフが「その間に体得した知見を基にして、主として理論的見地における反省を加えて作成した」十二の論文から成る同研究所設立十周年記念論文集である。

記念論文集にありがちな様に、本書に収録された論文もまた、その主題、内容ともに種々様々であり、大都市行政もしくは大都市圏についての一般的論述（吉富、長浜、岡崎）から、特に、阪神都市圏に関する問題提起（中沢、柏井）更に、下水道事業（竹中）や人事相談（足立）に至るまで多種多様であり、中には、大都市の研究というにそぐわない論文も見受けられるが、それはそれとして、各執筆者が夫々の専門的立場から現状をみつめ、積極的に自己の意見を開陳しているのは意義あることといえよう。こうした点は、大都市一般についての論文にかぎるならば、㈠吉富教授が Arthur Maass の Area and Power, 1959 をはじめ最近の研究成果をとりいれて、大都市を中心とする政治権力の地域的配分を問題としていること、㈡長浜教授が大都市圏計画を行政上の区域問題として規定し、しかし乍ら、この区域問題には二型があるとして、「行政上の区域の性格を新しい観点から再検討する」立場にもとづく大都市圏計画の開発計画としての意義を強調して、全国的な立場からの考察を要請していること、更に、㈢岡崎助教授が大都市圏内部の対立を、その論理的過程にはいささか疑問があるにせよ、論じていること等にもうかがえよう。

只、全体として、大都市の行財政にとって基本的前提となるべき社会、経済学的な実態と理論への認識が浅いことが惜しまれるが、これは同研究所の性格からいっていたしかたないことであろうか。（有斐閣・昭和三六年三月・A5・二二五頁・五五〇円）

—高橋潤二郎—